

特集●あの人が語る 「私のオブリ」

書道家・墨絵画家
成澤秀麗
SHUREI NARISAWA



●成澤秀麗さん●プロフィール
東北学院大学経済学部、青山学院大学文学部卒業。2001年、東京書作展で内閣総理大臣賞を受賞。7年間のOL生活を経て2002年に書道家を目指す。2005年、NYで個展開催。国内では2006年に玉川高島屋で個展開催。2006年秋にはパリでワークショップ開催。色彩を用いたデザイン的な作風が特徴的で、パッケージデザイン・キャッチコピー制作なども行っている。現在は書道普及協会を主宰し、講師養成をしながらエッセイ執筆や出版なども。

著書
『失敗力』をつければうまくいく』(あさ出版)
『文字が変われば、ココロも変わる。～幸せがやってくる、筆跡セラピー～』(学習研究社)
『名言なぞり書きで学ぶ 文字上達練習ノート』(総合法令出版)
『おとなのポケット書道 昭和歌謡のタイトル全118曲を紹介!』(中経出版) などがある。



「共走共汗」 秀麗書

三愛石油グループが二〇〇九年度に提唱するSS経営方針は「共走共汗」。生涯顧客化という共通の目標に向かって、共に走り、共に汗をかこう、それを共にやり遂げていこうという宣言です。年頭を飾り、「書く」ということは演じるということ」とおっしゃる秀麗さんに、生涯顧客化の必要性と、それを実現するための「共走共汗」への熱い思いをお伝えし書にさせていただきました。

● ● ● 書道が教えてくれた 仕事のありがたみ

私は山形県出身です。書道の先生になりたいと、最初に意識したのは七歳の時でした。

私の書道の先生は近所のおばあちゃまでしたが、キリリと着物を着こなして教えていたその姿、立ち振る舞いがとてもきれいな方でした。子ども心に、とても素晴らしいと感じたものです。

私の母親は教師だったのですが、実際に教えている現場の姿というものは見たことがありませんでしたので、そのおばあちゃまが、いきいきと仕事をする女性

の第一号としてインプットされたようです。私の祖母も着物を着ていて、この先生のような立ち振る舞いをする人だったので、こういうふうな歳の取り方をしたいなと常々思っていました。祖母は、当時の電電公社(現在のNTT)でバリバリ働いていたキャリアウーマンでした。私を取り巻く幼い頃の世界はこんなふうだったの

書道家として本格的にスタートを切ったのは二十九歳の時です。当時はOLをしながら書道の勉強をしていて、二十代のうちに書家として自立したいと思っていました。不況の時代だったこともあり、お給料とボーナスの

元の子どもたちに書道を教える教室を開いたのです。その時は、それが自分の

肌合うかどうか、とにかくやってみようという気持ちはなりました。子どもたちと接してみると、その無邪気さにあらためて気づかされ、感動を覚えました。母親が中学校の教師をしていたものから、子どもたちに書道を教えることになったので、どういふことに気をつけたらいいか聞きましたら、「子どもには良いことも悪いこともはっきりい言わないと伝わらないよ」と助言してくれました。それが私の性格にぴったり合っていたように思います。

OLとして職場にいます。どうしても人間関係に気を遣うことが多く、それが私にとってはストレスになっていました。

社会で働くことは、そうした難しい人間関係の中で良い関わりを維持していくことなのでしょうが、子どもたちと接して、良いことは大げさに褒め、ダメなことはダメとはっきり言うことが、私自身にとってすごく気持ちの良いことだと気づきました。毎週土曜日は、私にとつ



て心が洗われる時間になったのです。

その時、私は二十八歳でしたが、社会人七年目にしてようやく、子どもたちに書道を教えることを通して働くことの素晴らしさを感じました。

当時、生徒はわずか二人でしたが、子どもたちの親御さんからいただく毎月数千円のお月謝が、私にとってはすごい宝物でした。

『ああ、こんなに楽しい思いをしてお金をいただけるなんて、仕事ってなんて素晴らしいんだろう』と実感しました。

それまで会社からいただくお給料に不満を覚えていた私が、金額の多寡ではな

く、初めて仕事そのものへのありがたみを感じ、心の底から感謝の気持ちを覚えた瞬間だったのです。

● ● ●
競争社会の中で
己に克つということ

毎週土曜日の書道教室を一年間続けた後、退職して書道に邁進しました。

おかげさまで努力が報われ、第23回東京書作展で内閣総理大臣賞を受賞し、書道家として世に認められることとなりました。

こうした大きな賞をいただいた後は、多くの人は競争のプレッシャーに負けてエネルギーが落ちてしまう

ことが多いようです。私は周りの人に影響を受けないでいようと決心しました。競争相手を「人」にしてしまおうとげとげしくなり、ビジネスで言えば「競合他社」ということでしょいか。

相対的な優劣にこだわるのと、自分の求める世界が見えなくなりますが、たとえば、書の世界で言えば、他の流派の人でも、必要と思う時には協力し、みんなと一緒に頑張っていくということが「自分に克つ」ということだと私は思います。

賞をいただいても、自分が評価されたという優越感を持つのではなく、どんな評価をいただいても自分がおられないように留意しなくてはならないと感じています。

優越感ではなく、自分自身の軸としての自信を保つということなのです。

● ● ●
その道を極めるには
楽しみながら

自分を捨てて奉仕するのは、ストイックなイメージがつかまいますが、たと



えばナイチンゲールにとっては、周りの人たちが享楽と言うような、美味しい食事やお酒を楽しんだり、友人知人たちと遊びまわることなどより、多分、奉仕活動をしていることのほうが我を忘れるほど楽しいことだったのではないかと思います。

ナイチンゲールだって、眉間にシワを寄せて、奉仕活動をしたわけではないでしょう。楽しくて夢中になれることをひたすら続けてきたはずですよ。

私にとって、書道をやっているということは究極のわがままだと思っています。もしこれが、恰好をつけ

たり、自分の見栄のためやっているとすれば、疲れたら眠ってしまおうというふうになるのでしょうか、本当に自分がやりたくて、自分の喜びのためにやっていることなので、これをしている時間が一番楽しいのです。

極めるという言葉には、自己犠牲的なイメージがつかまっています。

書道でも「たった一枚の出品作品のために千枚も書いた」と言うのと、たいていの人は「そのぐらい書かないと極められないんだね。私には無理」とすぐに首を振ります。やったことのない人には、創作の苦悩や自



己犠牲しか目に映らないようです。

当の私とは言えば、楽しく書きまくっていたら、いつのまにか夜が明けていたという感覚なのですが……。

もちろん義務感でも自己犠牲でもありません。それどころか、自分の楽しさを追求することに夢中だったのです。

楽しさを追求する意欲がなければ、極めたいという気持ちには生まれません。辛そうに努力したほうが価値があるように見えるのは、国民性かもしれません。

こういう話をすると、軽々しく思われることもあられるでしょうが、「我を忘れるほど楽しめることを見つけて極めてみませんか」と

私は出会う人ごとに言ってしまうのです。

● ● ●
一日一笑

「一日一笑」という言葉は何年前か、「一日一善よりも一日一笑」と、何気なく思いつき、軽い気持ちで書きました。

その時は、「善いことをしなければ」と思い込むより、誰かを楽しい気分にしたかというのではないかという気持ちで書いたのです。

実は最近、切実に感じたことがありました。身近にいる家族、自分を産んでくれた母親が、「笑う」ということの大切さを身をもって教えてくれたのです。

母は長いこと病気をして

いるのですが、病気というものには、治るのがあたりまえのことだと私はずっと思ってきました。

しかし、もともと治らない種類の病気なので、そのことでジタバタせず、なるべく、「今日は楽しかった」、「今日の食事は美味しかった」というような、楽しい話題に終始するようにしました。

そしてある時期を境に、母親が「病氣」の話には触れなくなりました。母親自身も病氣のことは悩んでいたのですが、その病氣と数十年付き合ってきた後、「産んでもらったことを母(私の祖母)に感謝しな

くちや」と笑顔浮かべて、ポロツと言うようになりました。ごく最近のことです。

それ以後、たくさんの楽しい会話が積み重なり、私は生きていくことへの感謝の気持ちを抱くようになりました。

そして、笑顔で接することの大切さを痛感しました。笑顔というのには自分に余裕がないと生まれません。笑顔のエネルギーは、どんな時でも、人と人との関わりを円滑にしてくれるので



●成澤秀麗さんのホームページアドレス
<http://www.narisawashurei.com/jp>